あとがき

中地 義和

塩川徹也先生の古稀をお祝いするという名目で寄稿を募った記念号が、これほど多くの参加者を得て、重厚な一巻として刊行される運びになったことをうれしく思う。

塩川先生は 1976 年、三十歳の若さで京都大学教養部助教授に就任され、その四年後に本学文学部に教官として戻られた。以後 2009 年 3 月に定年退職されるまで、学部・大学院を通じて先生の学風とお人柄に接した卒業生はどれほどの数になるだろうか。私自身は年齢が近すぎて、先生に直接お習いする機会はなかった。先生が本学に戻られた年に留学に出かけ、パリに長居をしたこともあって、はじめてお目にかかったのは帰国後の 1986 年春だったと思う。駒場のフランス語の先生方の親睦旅行に塩川先生も参加され、宴の翌朝、箱根の芦ノ湖で、白鳥を象った二人乗りボートに同乗することになった。少々緊張しながら先生の横に腰を下ろすと、先生はオール代わりのペダルを全力で踏まれ、こちらも同じ程度に力を入れないと旋回するばかりでうまく前進しないので、懸命に踏みつづけたことが懐かしく思い出される。92 年からフランス文学研究室の一員に加えていただき、長きにわたって先生と間近に接する機会を与えられたことは、思えばまことに幸運であった。二歳年長の田村先生と塩川先生は、ある意味では対照的なお人柄であるが、まれに見る友情と信頼の絆で結ばれたお二人の庇護のもと、フランス文学研究室の運営は安定し、われわれ年少の教員はのびのびとやらせていただいた。

1975 年にソルボンヌに提出され、塩川先生がパスカル研究者として国際的認知を受けるきっかけとなった学位論文 « Pascal et le miracle »（78 年ニゼ書店刊）以後の連綿たるお仕事について、正面から論評する能力は私にはない。御著書や抜き刷りをそのつど頂戴しながら、門前の小僧にもなれていない恥ずかしさで一杯である。それでも、先生が発見された問題を定義し、考証を展開される手つきの堅固さ、言葉遣いの厳しいまでの明晰さには、いつも強い感銘を受けてきた。「ある謎が、専門家の間でも未解決である、あるいは問題として明瞭に意識されていないという手応えを感ずるとき、本来の意味での研究が始まる。研究者になるとは、自らが所属する学問共同体で、何が問題になり得るかを判定する能力を身につけ、問題の解決に寄与する実力を養うことであろう」（『パスカル考』2003 年、あとがき）。簡潔極まる言葉

でこのように定義される学問を、先生は文字どおり実践してこられたわけで、一つの問題の検討が派生的疑問を生み、それ自体が問題として定立しうるものという確信とともに新たな考証に移り、パースペクティヴを拡げていかれる先生の学問のダイナミズムを、目の当たりにする思いがする。

同時に、学問そのものをめぐる議論とは別の次元で、先生が研究生活の当初から繰り返し告白しておられる一つのディレンマに、私は強い共感を覚えてきた。フランス語の土俵でパスカルを研究され、フランス人研究者を主たる読者に想定する論文を次々と発表される一方で、その倫理的対部のように、そうした研究成果をどのような形で日本人読者に届けるか、異文化に身を投じて発見した事柄を自文化のなかにいかにして持ち帰るかという問いを、先生は一貫してご自分に投げかけてこられた。

それに答える最初の試みが自著の翻訳である。先生は博士論文に基づく御著書を自ら日本語に翻訳される（『パスカル　奇蹟と表徴』岩波書店、85 年）。しかしその作業が容易ではなかったことが、あとがきに記されている。「異なった言語で同じ事柄を書くことはおそらく不可能だ」、「一再ならず仕事を放棄したくなった」とまで言われ、その理由を、「あらゆる書物が、それの想定する読者によって、意識するとしないに関わらず、規定され」、「フランスでフランスのパスカル研究を念頭において書かれた」書物を「そのまま日本語に置きかえたからといって、日本文化の中に移植されるとは限らないから」だとされる。それにもかかわらず、先生はその後もフランス語で発表された論文の多くを日本語に訳され、逆に日本語で書かれた論考をフランス語でも発表される。御自身が指摘されるように、『パスカル考』に収められた十六の文章のうち十篇が日仏両語で発表されている。先生のおっしゃる二言語で同じ事柄を書く困難、とくに一方から他方に翻訳することの困難は、私自身強く実感するところであり、それはある意味では、他人の書いたものを訳す場合よりも大きいとさえ思われる。塩川先生がそれでも果敢に自己翻訳を試みられてきたのに対し、私はひたすら回避してきた。類似の内容を言うにしても、一つの言語で延べたことをいったん換骨奪胎して諸要素を再配置しないでは、それができなかった。

これに関連して思い出すのは、塩川先生が 1997 年に国際フランス研究協会（AIEF）のシンポジウム「世界におけるフランス文学研究」で行なわれた「日本におけるフランス文学研究の現状 —— 文献学者と知識人、通約不可能な二つの世界」（« L’état des études françaises au Japon : philologues et intellectuels, deux mondes incommensurables »）と題する発表である（*CAIEF*, N°50, 1998. の

ち『発見術としての学問』［2010 年］に翻訳を収録）。かつて抜き刷りをいただいてとてもおもしろく読んだ記憶があるが、いまあらためて読み直してもやはり興味深く、合わせて、日仏両語版が優劣つけがたく明快であることに感嘆する。同時に、当時抱懐した一つの疑問が、自分のなかでまだ氷解せずに残っていることにも気づく。

この発表で、先生はまず、フランス語圏にもヨーロッパにも属さない日本では、フランス語原文が読める人間の数が限られているにもかかわらず、フランス文学・思想の主要作品のほぼすべてが翻訳されるおかげで、最新流行の外国の文学・思想に貪欲な知識人や学生を中心に、日本語によるフランス文学研究が活況を呈してきたという特殊事情を提示される。ヨーロッパの多くの国では比較的最近までフランス文学が翻訳なしで読まれ、その国の言葉で記されるフランス文学研究が必ずしも仏訳されなくともフランス本国の研究者に受け止められるというように、広域「文芸共和国」が機能していた。日本の研究者が日本語でそのような共和国に参与することは、当然のことながらありえない。翻訳のみでフランス文学を論じる日本人の読み方が、本国のフランス文学研究に跳ね返って受け止められることは原理上ありえない。翻訳に基づくそうした和製フランス文学研究の対極に、先生はフランス語の土俵でフランス人に伍してフランス文学研究を行なう少数の研究者を位置づける。一般にフランス人をはじめとする外国人研究者が、日本におけるフランス文学研究の盛況と高水準に言及するとき、彼らが念頭に置いているのは、彼らの文芸共和国に参入しているこれら少数の日本人研究者の、総じて綿密な考証に基づく文献学的功績である。

前者は、フランス文学研究とはいえ、もっぱら日本語のなかで営まれる日本文化への貢献であるのに対し、後者のフランス語の土俵での文献学的研究は、いわばフランス文学という大伽藍を建てるために必要な石材の一つを届けているに等しく（先生はこの石工の比喩を好んで用いられる）、その石を日本に持ち帰っても「茶室やうさぎ小屋［のような家屋］」の建材にはなりえない。彼らの仕事はもっぱらフランス文学研究への貢献であって、日本の文学や文化への貢献にはならない。したがって彼らの存在は日本ではほとんど知られることがない。そして二つのカテゴリーの研究者の間には基本的に交流がない。日本におけるフランス文学研究の現状を、先生はおよそ以上のように要約された。

もちろん現実には、二種のフランス文学研究は相当程度浸透し合っている。フランス語で論文を書く日本人研究者がしばしば翻訳にも携わる事実一つを

とっても、それは明らかだ。先生御自身が自著の邦訳という作業を通じて、両者の間に架橋を試みられているではないか。そして二つの言語の間の、研究と読書の間の、文献学者と知識人の間の多元的架橋こそ、日本のフランス文学者が担う重要な任務の一つではないだろうか。先生は御自身が実践しておられる架橋の側面をなぜあえてスルーされるのか。―― 論文を再読したいまなお心に懸かる疑問とはこの点である。おそらく塩川先生はそんなことは百も承知で、弁論上のレトリックとしてあえて対立を押し出し、両者を「通約不可能」なもの、不浸透性のものとして提示されたのだろう（日本語版の付記はそのように読める）。あるいは、自らに課してこられた自己翻訳という「苦行」を、架橋という耳あたりのよい語に還元したくはなかったのか。それとも、この架橋が文献学者から知識人に向けての一方的メッセージでしかありえず、アントワーヌ・コンパニョンの「フィロロジー」*VS*「アレゴリー」の用語法に従えば、後者から前者へのアレゴリックな負荷の跳ね返りは期待すべくもないということか。

『パスカル 奇蹟と表徴』から十八年後に刊行された『パスカル考』のあとがきで、先生は自著の翻訳に難渋した経験を振り返り、もう一度「通約不可能性」のタームと石工の比喩を用いる。そしてこう述べられる ―― 「フランスの文学と思想を、本場の土俵でフランス語によって研究することは、いわばノートルダム大聖堂の建造に外国人労働者として参加するようなものである。石を切って積むのは日本人だとしても、所定の場に組み込まれた石は、フランスの地に根を張った建造物の一部であり、それ自体は故国に持ち帰ることはできない。［…］もちろん日本でも日本語によるフランス文学研究が行われているが、それは言ってみれば、茶室か寺院の建築を目指している。」ここまでは、国際フランス研究協会のシンポジウムにおける発表を貫いていた峻厳なる二元論が、そのまま保持されているかに見える。ところが続く段落で、日仏両語で発表した文章が『パスカル考』の大半を占めることに触れながら、先生はこう記される ―― 「「同じ事柄」を、一方は教会の石柱の一部として、他方は寺院のふすまの桟として用いる機会を、それぞれの文化から与えられたのである。」

この一文を書きつける塩川先生は、もはや厳格な「文献学者」であるにとどまらず、進んで「知識人」の役割を引き受けておられる。そして前者から後者に向かう架橋のみならず、後者から前者に向かう架橋もあり得ることを、身をもって示されている。ただ、それが意味をもつのは、御自身が二役を演じられてこそ、である。先生のなかでは、知識人なき文献学者はありうるが、

文献学者なき知識人はありえないからだ。石工か指物師かの二者択一から、石工にも指物師にもなりうる融通無碍への道は、日本語でパスカル論を書きはじめられるよりも前、博士論文に基づく御著書を日本語にするという「苦行」に「難渋」されたときに始まっていた。翻訳とは、二つの言語にそれぞれ片脚をかけて架橋を図る試み、テクストをそれが根づいた言語と文化から土ごと引き抜いて、もうひとつの言語と文化の土壌に移植する試みであり、否応なしにフィロロジーからアレゴリーに向かうからだ。

これまで自著以外の翻訳にはきわめて慎重であられた塩川先生が、ついに『パンセ』の翻訳（岩波文庫、全三巻）を完成された。断章そのものの明晰でシャープな訳はもちろん、その配列には精密な論理が、註には懇切な配慮がうかがわれ、上巻と下巻にはそれぞれ書物ならざる書物としての『パンセ』の特異性とキリスト教護教論をめぐる本格的な解説が、さらに下巻には重要で著名な名句を集めたアンソロジーや、パスカルに帰せられる「語録」まで添えられている。パスカルの思想を立体的に浮かび上がらせてくれる、まさに『パンセ』大全である。この大きな仕事に取り組むにあたり、塩川先生は恩師で『パンセ』編纂者であるジャン・メナール教授の編纂の心構えをそのまま翻訳の心構えにされたという。すなわち、翻訳者には「著者に対する責任と読者に対する責任」が二重に課せられており、「著者に対しては忠実であること、読者に対しては開かれていること［…］著作を通じて著者との交流を目指す読者の期待に応えること」である。下巻の解説末尾でもメナール教授の言葉を想起しながら、「編纂者および翻訳者の使命は［…］パスカルと読者との橋渡しとなるテクストを提供すること」であり、「『パンセ』の翻訳は科学と芸術、学問と文学、さらには文献学と哲学の両方にまたがる企てである」ことを肝に銘じて仕事を進められた、と振り返っておられる。

学位論文執筆からこの『パンセ』訳にいたる半世紀近い時間の流れのなかで、塩川先生は一貫して言葉（ロゴス）への愛としての文献学（フィロロジー）を深めてこられた。言葉への愛は、それが行使される個別言語に強く結びついており、パスカル研究を日本語と交差させる内的または外的な要請に突き動かされるたびにある種の抵抗や軋轢が生まれたのは当然である。自著の翻訳を「難渋」や「苦行」の語で形容された先生は、『パンセ』訳という大きな仕事をいかに切り抜けられたのだろうか。先生のなかの石工と指物師は、この長丁場の仕事を通してどのような関係を新たに取り結ぶにいたったのだろうか。解説にもあとがきにも記されない苦心のほどを、近いうちにぜひ伺いたいと思っている。